実践事例

（福祉　郷土）　井田小学校　５年

みんな笑顔！ふるさと笑顔プロジェクト

９月～２月（５５時間）

１　ねらい

・学区にある老人福祉施設「グループホーム楽楽苑」の利用者やスタッフの皆さんとのかかわりを通して，相手を思いやり，考え，行動する態度を養う。

・体験を通して感じたことや考えたことを友達と意見交流することで，自分の思いや考えを広げたり，深めたりすることができるようにする。

・自分たちだけでなく，楽楽苑利用者の皆さん，スタッフの皆さんが笑顔になる交流の仕方を探りながら，課題発見力，情報収集力，思考判断力などを高めていくことができるようにする。

２　実践の概要

（１）ふるさとを考えよう（「ふるさと」フリートーク）

今年度より「ふるさと学習」を進めていくことになった。５年生の子どもたちにとって「ふるさと」とは，どのようなものなのだろうか。「ふるさと」について，フリートークを行った。

そこでは，「田舎」「トトロに出てくるような所」と話す子もいれば，「家族や友達と過ごした場所」「思い出がある場所」などと話す子もいた。そして，「みんなのふるさとは？」と聞くと，だれもはっきり答えられず首をかしげた。そして，「大人になったら分かるんじゃない」「大人になったときに思い出とかを思い出す場所」「戻りたくなる場所」などの意見が続いた。「家族や友達と過ごした場所」「思い出がある場所」という意見から，「井田がふるさとになる可能性は？」と聞くと，「あるある！」と今度はだれもがうなずいた。「自分たちのふるさとは井田である」と，はっきり思っている子はいないが，なるかもしれないとは思っているようだ。その後，「ふるさとはどんなところであってほしいか」という意見を出し合った。

（１）井田のためにできることを考えよう

「ふるさと」フリートークでの「ふるさとはどんなところであってほしいか」の話し合いで様々な意見が出た中で，「井田学区には優しい人がたくさんいて協力的。このことはいつまでも変わってほしくない」という意見が出た。「優しいってどういうこと」と問い返すと，「困っているときに助けてくれる」「優しく声を掛けてくれる」などの意見が出た。そこで，ボランティアという活動があることを話し，ボランティアについて調べ，発表し合った。そして，様々なボランティア活動が行われていることを知ったところで，「ぼくたち，わたしたちができるふるさとボランティア」をテーマにパネルディスカッションをした。前田川や学区にある公園の掃除や老人介護施設への訪問，幼稚園の行事の手伝いなどの意見があがった。

ちょうどその頃，本校で行われた学区敬老会に，学区のお年寄りがたくさん来校された。この機会に何かできることはないかと考え，有志でお年寄りのみなさんをお出迎えすることにした。１５人程度の子が朝早くから集まり，あいさつをしながら出迎えた。このときに参加したほとんどの子が日記で「初めは緊張したけれど，わたしたちがあいさつしたらみなさんもあいさつしてくれた。だんだん慣れてきて，大きな声であいさつできるようになったらおじいさん，おばあさんも笑顔になった。やっているうちにだんだん楽しくなって，わたしたちがあいさつするまでは無表情だったおじいさん，おばあさんが笑顔になってくれることがうれしくなった。もっと喜んでもらえることがしたい」という内容のこと

を書いており，パネルディスカッションでもこのときの経験を発言する子もいた。これらの話し合いや経験から，学区にある老人福祉施設「楽楽苑」訪問を行うことは，よいタイミングなのではないかと考え，子どもたちに提案したところすぐに「行く。行く」と意欲を見せた。そこで，「ふるさと笑顔プロジェクト」と題し，継続的に楽楽苑のみなさんと交流活動をすることになった。

（３）「楽楽苑」を訪問して，おじいさん，おばあさんと仲良くなろう（ふるさと笑顔プロジェクト）

【1回目の訪問】1学期に，福祉実践教室で高齢者疑似体験をした子がいたものの，「カルタならできると思っていたけど，おじいさん，おばあさんにとっては（絵札の）字も見にくかったみたいでできなかった」「お手玉をしようと思ったら，おじいさん，おばあさんはできなかった。ふるさとインタビューをしたけれど，わたしが言ったことが伝わらなくて，スタッフの人が助けてくれた」など，子どもたちが思っているほど，おじいさん，おばあさんと一緒に楽しもうと思ったことができなかったという課題ができた。

【2回目の訪問】楽楽苑のスタッフさんからの提案で，おじいさん，おばあさんは，どんなことができるのかを見せてもらうために，普段施設でしていることをしてもらい，子どもたちでもできることを一緒にしたり，ゲームに参加したりすることにした。１階のデイサービスを受けているみなさんとは，手遊びやリズム遊びを楽しみ，２，３階で生活してみえるみなさんとは，洗濯物をたたんだり，車いす介助の手伝いをしながら，買い物に行ったりした。おばあさんに洗濯物のたたみ方を丁寧に教えてもらったり，楽楽苑のおじいさん，おばあさんが楽しめるリズム遊びや手遊びを教えてもらって一緒に楽しんだりしながら，交流を深めた。「１回目より２回目の方がすごく話ができた。〇〇さんは井田小出身で井田小ができたばかりのときに入学した･･･おじいさん，おばあさんがいっぱい笑ってくれてうれしかった」と，活動を振り返る子が多かった。

【3回目の訪問】2回目の訪問でしたことをもとに，もう一度，自分たちで何をして交流するのかを考えた。１階はレクレーション，２・３階は生活が主な活動になるので，どちらの方と交流したいか選択してグループを作り，計画をした。交流を重ねるごとに，名前を覚えたり，たくさん話せるようになったりして，かかわりが深まった。楽楽苑の皆さんも，「みんなが来てくれるだけでうれしい」と直接子どもたちに言ってくださるので，子どもたちも自信をつけ，もっと喜んでもらいたい，工夫したい，こうすれば良かった，次はこうしたいなどと，次の交流会に向けて，具体的に考えるようになった。

３　実践を振り返って

楽楽苑のおじいさん，おばあさんが笑って喜んでくれたり，交流を重ねるごとに話ができるようになったりすることで，「次はこうしたい」と，反省を生かした交流計画を意欲的に考えることができるようになった。子どもたち自身も交流活動を楽しんでいることが，活動後の振り返りカードから伺える。核家族化，少子高齢化社会を考えたとき，同じ学区にある小学校と老人福祉施設の交流は，価値のある活動になると考える。高齢化社会がますます進むとされている社会を考えたとき，今，自分たちはこの井田で何ができるのか，７０年後（自分たちが８０才以上）自分たちの姿を想像しながら，楽楽苑の皆さんとの交流をもとに，今後，考えていきたい。